



社会福祉法人 薄光会 広報誌

ま

ら

め

ま



第 2 号

豊岡光生園



三芳光陽園



鴨川ひかり学園



湊ひかり学園



平成16年11月30日

社会福祉法人 薄光会 広報委員会発行

本部、豊岡光生園：〒299-1742 千葉県富津市豊岡 3535-1

TEL 0439-68-1711

三芳光陽園：〒294-0825 千葉県安房郡三芳村上堀 280

0470-36-3211

鴨川ひかり学園：〒294-2854 千葉県鴨川市代 1297

0470-99-3311

湊ひかり学園：〒299-1607 千葉県富津市湊 934-18

0439-70-6551(デイ)

0439-70-6552(通所)

『親と職員だけで運営している法人』

社会福祉法人 薄光会

理事長 山崎幸男

私たちの法人は、重度の知的障害を持つ子等が、幸せに障害を全う出来るようにとの思いで創られた、親と其の子等の生活を支え支援している職員だけで運営している法人です。

中央では、財源不足から来る社会保障費に係わる諸問題が浮上し暫く経過して居ますが、今だなんら具体策が講じられない状況にあります。

幸い、千葉県では、地方で出来る新しい時代の福祉を目指し、中核支援センター構想を打ち出し、慌しく実施に移しました。又、袖ヶ浦福祉センターの規模縮小を始めとして、畑通勤寮、加曾利養護施設の民間委託等の手続き、官製福祉施設解消対策を打ち出し、中央（県）から地方（市町村）へ、官から民への移行による行政改革は既に始まって居ります。

このような行政の変革に対応して、私たち法人の運営方針も、必然的に、従来より研鑽を重ねて参りましたが、重度知的障害者支援のノウハウを活かしながらも、地域に密着したオールラウンド型に変化させて行かねばなりません。

しかしながら、悪戯に間口を広げ、法人の名を広く世間に誇示したり、施設を拡張し、其の規模を誇るよりも、ひたすらに、社会の片隅で苦しんでいる人々に、ほかりをとの重いから、重度知的障害者を中心に、経済的に、或いは家庭環境に、真に福祉を渴望している方に、直接手を差し伸べて参り度いと存じて居ります。

私達は、ここ豊岡で幸せに生活している吾が子らを思うとき、この地にも同じ環境の子供達、或いは子を持つ親達があれば、看過する事はできないと思つて居ります。許される事であれば、世間の動向に充分耳を傾けながらも、あまり左右されず、背伸びをせず、法人の理念に添った施策を揃え、身の丈に合った方法で着実に質の高い福祉の道を求め続けて参りたいと思つて居ります。

今年四月、内房の富津市上総湊に設立した、デイサービス及び通所施設湊ひかり学園と、以前よ

り運営している外房の通所施設鴨川ひかり学園の二つの光を、地域のニーズをリサーチするヘッドライトとし、豊岡の成人入所及びショートステイ施設豊岡光生園、三芳村の特別養護老人ホーム三芳光陽園と合わせて効率よく活用する事により、

最近の福祉政策にマッチし地域社会に密着した、其々のライフステージに沿って安心して此処（この地域）で生涯を全うする事の出来る施設を目指して居ります。

又、心から利用者の幸せを思い、身を挺して働いて居る職員の待遇、設備、施策等全ての面で不十分な事はかりですが、遅れ馳せながら着実に一歩ずつ改善してまいりたいと思つて居ります。その為の、働きやすい環境作りに向けて、法人及び施設内諸規定を見直し、権限の理事長、施設長一極化を出来る限り排除し、次世代を担う若い方々の有意義な意見を充分に取り入れやすい組織に変化させました。これで、若い柔軟な頭脳による、法人運営の出来る環境を創り、更なる飛躍を期すべく世代交替を果たして参りたいと思つております。

園だより

『夜勤者』

ある日のベットメイク時、増設部に支援に入った私に「おいっ」と一言。千原さんが私の肩をたたきました。

千原さんは、文字を書き、何とか意志を伝えることが出来る利用者の一人です。

そんな彼が、床に向かって必死に文字を書いています。

「何だかわからないよ。」と言う私と同じくらい困った顔の千原さん。そこで、自分の手帳とペンを渡してみました。すると、うれしそうに何か書き出し、書き終えたものを見せてくれました。しかし・・・これがまた、解読困難な暗号のようです。

「うかな？」 「ちがうー！」

「うでしよう？」 「ちがう!!」 というやり取りを何度行ったかわかりません。しばらくすると、千原さんの言葉とジェスチャーの中から 「はやし」という言葉を見つけました。

「はやしようこ？」 大きな声で「はい」と返ってきました。またまた手帳に書き出した千原さん。

「か」と書いてあるのがわかります。

「かとうのぞむ？」 再び大きな声で 「はい」 満足そうな笑顔です。さらに手帳に何かを書こうとしたので、もしかしてと思い

「おかだいさお？」 と聞くと、 「はい!!」 大満足の様子です。

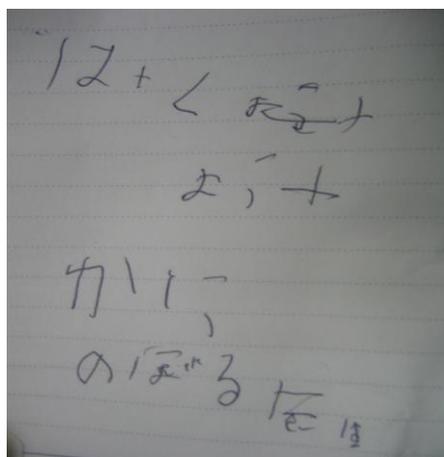
なぜこの三人かわかりましたか？ そうです、この日の夜勤職員を必死に教えてくれていたのです。

千原さんの、必死に伝えようと頑張る顔と、わかってもらえた時の嬉しそうな顔を見ることができ、そして何より千原さんの伝えたいことをわかってあげられたことがとても嬉しく感じた瞬間でした。

ちなみに、千原さんの書いたメモをよく読み返してみると、三人ともフルネームで名前が書いてありました。

ぜひ見てください。

大森 匠



(はやしようこ)

かとうのぼる (本名はかとうのぞむ)

そんな千原さんが・・・

夜勤者が誰か職員に教えてくれる千原さんにも失敗談があります。

ある日の夜勤は伊東さん。彼女は洗濯場に用事があり入っていききました。伊東さんに挨拶をしようと、後を追って洗濯場へ駆け込んだ千原さん。

いつものように肩をたたき、「おはよう」と大きな声で挨拶しました。そして、振り返った職員を見て「あれ〜！」

彼が伊東さんだと思っただけで声をかけた職員は、林さんだったのです。とてもあわてたようです。間違ったとばかりに少々照れながら再び

「おはよう」と挨拶しました。(こんどこそ、伊東さんに間違いないと彼は思っていたことでした)

ところが彼は、声が出ないくらい驚き、目をまん丸くしています。今度は、伊東さんと私(小野紗代子)を間違えてしまったのです。そして、真っ赤な顔をして逃げ去っていききました。

普段職員の顔を間違えたことのない千原さんが・・・ どうしたことでしょう。

このとき洗濯場にいた三人の女子職員は、三人とも黒のTシャツを着て後ろを向いていました。その姿がみんな伊東さんに見えたのでしょうか。

その日から千原さんは、職員の顔を見てから挨拶するようになりました。

小野紗代子



新企画！ グループ旅行



(九月十四日・十五日)

今年の旅行は一步進んだ旅行。それは・・・。
九グループに別れ、それぞれが箱根湯本のホテル「河鹿荘」を目指します。帰路も、中華街で落ち合うこととなりました。

職員は何度も自分のグループの企画を話し合い、修正し、乗り物の発車、到着時刻まで調べ上げ、利用所に楽しんでもらえるかを考え抜き旅行に臨みました。各グループの連絡方法も、これまた初めて。携帯電話のグループメールで行い、このグループメールのやり取りが、実に楽しく、各グループの特徴を出してくれましたので紹介したいと思います。

園長：「テストです。番外班 海ほたるについています。」

(バックアップ班、カペラワゴンで進行中)
八班・泉水：「保土ヶ谷バイパスで渋滞中です。」

(ハイエース一号で進行中)
九班・幾野：「幾野圭裕です。」

(名前だけ言ってどーすんだよ！)
再び幾野：「ちゃんと届きましたよ。」

(高速バスでアクアライン経由川崎へ)
一班・多田：「問題ありません。もうすぐ東京駅です。」
三班・大森：「只今久里浜です。」

(JR皆と反対方向へ金谷でフェリーに乗り換え、再びJRで進行)

遠藤：「現在地海ほたる。園長と合流。」
(ハイエース二号で進行中)

※ 高速バスに乗る班、電車に乗る班、フェリーに乗る班と様々な経路で進行。

長い距離の歩行が困難な利用者は車両でホテルを目指します。園長は乗る番外班は、緊急事態発生時の緊急車両。

園長：「通信OK！ 次は2時に小田原付近にいます。」
総合連絡係小野：「遅くなりましたが全班異常ありません」
園長：「番外班より たいま旅館到着。少々時間をもてあまし気味です。：zzzzzz： 何かあったら連絡ください。」

総合連絡係小野：「宴会場所について 一階の花月で十八時からです」

※ 九グループ無事ホテルに到着。

七班・遠藤：「オハヨウゴザイマス。本日の予定ですが、お天気も良いので計画を変更して芦ノ湖方面へいきたいと思ひます。車椅子二台とご老体二人(六十代職員)を引き連れての体力勝負!! 見かけた方はご声援宜しくお願いします。」

園長：「夕べの様子を全般的に知らせてください。」

六班・伊東：「昨晚のヨシコさんの様子ですが、おそらく皆さんの期待に添えたのではないかと思ひます。予定通り出発します。」(ヨシコさん、興奮して眠れず、園長が一晩ついていました。)

一班・大塚：(緊急電話 園長へ)
「ヤッチャンが発作を起こしました。寝かせてあります。詳しい状況は、(中略)・・・という具合です。様子を見ます。六班が近くにいます。」

園長：「これからの道中があるので、そちらへ向かいましょうか。この車に乗せましょう。」

一班・多田：「ヤッチャンは復帰していますが寝不足のようです。動けますが、車のほうがいいと思います。」

園長：「了解。時間がかかります。休憩しててください。」

園長：「緊急連絡 一班のヤッチャン発作につき一時間二十分カペラに収容。本人元気なれど寝不足につき、一緒に行動します。」

総合連絡係小野：「緊急連絡があつたと思いますが、各班予定通りに行動してください。」

九班・幾野：「陶芸体験中！ 木村さんの湯のみが傑作です。」

六班・伊東：「大涌谷へいきています。黒たまごの味は：： ただのゆで卵でした。」

八班・泉水：「富士サファリーパーク。ただいまよりライオンのえさになります。」

五班・美江：「寄木細工の体験を済まし、少し早い昼食を食べようと準備中です。山奥のため、かなり寒く感じます。お土産になってお部屋に飾れたらと思います。」

四班・関口：「これよりえきへむかう」
(だから、どこかえきだつちゅうねん)

園長：「連絡 カペラは今、保土ヶ谷バイパスをアクアラインに向けて走行中。ヤッチャンは元気です。」

このように、メール連絡を取るにより、各班がすべてのグループの状況を知ることができました。実際のメール記録はA4サイズ七枚にも及ぶものですが、すべてを紹介できないのがとても残念です。興味のある方は連絡していただければ、すべてをお見せしますよ。



学園新聞

「ニューズ&トピックス」

* いつもありがとうございます

富永農園（富津市田原一三四）さん、僕達のために、いつも美味しい旬の野菜を届けてくれて、ありがとう。お昼に、皆で美味しく食べてるよ。僕達も、ひかり農園で富永さんに負けないくらいの野菜を作るよ。頑張るからね。

* サツマイモ大収穫

暑い時期に、僕達みんなが汗をかきながら一生懸命植えたサツマイモが大きくなったんだ。9月の終わりに皆で掘ってみたよ。いろんな形のイモがあつて、掘る事が楽しくなっちゃつて、夢中になっちゃつた。沢山採れたイモは、お昼に大学イモやイモ御飯にして皆でお腹いっぱい食べました。来年は、落ち葉焚きで焼きイモをやるぞ〜！

「厨房にインタビュー」



質問 最初に、何か厨房にまつわる笑い話とかありませんか？

厨房 いきなりですか（笑）。う〜ん、笑い話と

言われても・・・そうですね、食後とかよく利用者の皆さんがカウンター越しに顔を見せに来てくれるんですけど、例えばなおや君、私達が

洗い物をしているとスツと忍び寄ってきて、「洗い物楽しい？洗剤もつたいな〜い」と甲高い声でまくし立てさつさと行ってしまいます。突然、そんな事を言われて思わず吹きだしてしまいました（笑）。それから笑い話ではないですけど、食器を厨房のカウンターまで運んで来てくれた利用者自分なりの「ごちそうさま」を言ってくれるのを私達、いつも楽しみにしています。

質問 そうですか。厨房ファンがたくさんいるんですね。

厨房 私達は食事の時以外、利用者と接する機会が中々ありません。自ら積極的に声をかけてくれる利用者はもちろんですけど、自分からコミュニケーションの取れない利用者や接する時間としてお昼の時を活用してますね。

質問 わかりました。利用者の皆さん、食後はみんな厨房に遊びに行きましょ。

厨房 お待ちしています（笑）。

質問 あつ、すいませ〜ん。紙面の関係で・・・。

厨房 え〜もう終わりですか？メニューの事とか聞いてくれないんですか？

質問 じゃあ、お薦めのメニューは？

厨房 もちろん全部（キツパリ）。

質問 それか言いたかったんですね！。

（つづく）



「うちの送迎車はバスガイド付き！」

湊ひかり学園のデイサービス送迎車には名物ガイドさんが同乗しています。

毎朝、送迎車でガイドさんの家までお迎えに行きます。車に乗り込んだガイドさん、「次は〇〇に止まります。お降りの方はブザーでお知らせ下さい。」と早速仕事に取りかかります。利用者の皆さんがブザーは何処にあるのかと車内を探していると、「〇〇さんは顔が腫れています。」「〇〇さんは足のくるぶしが痛いよ。うです。」「〇〇さんは風邪をこじらせました。皆様、風邪が流行っていますのでご注意ください」と挨拶代わりの三連発。車内が爆笑の渦に包まれます。

調子に乗ったガイドさん、「〇〇さんは食べ過ぎでお腹が出ています。もう少しスリムになつてください。」「〇〇さんは寝不足の為ご機嫌ななめです。皆様、近づかないよう注意しましょう。」「とちよつと暴走し始めました。さらに外を眺めながら、「台風の影響で風が強くなりました。ドライバーの方は運転に気を付けましょう。」「と送迎職員にもアドバイスをくれます。

送迎車は学園に付くまで笑いが絶えませんが名物ガイド付き送迎車、皆さんも一度利用されてみてはいかが？

『恒例の敬老会』

毎年恒例の敬老会を九月二十日、敬老の日に開催しました。

当日の朝、会場準備が進む中、女性の入所者はお化粧で大忙し。女性職員に手伝ってもらい口紅やファンデーションで華麗に変身。照れくさそうに鏡を覗き込んで、顔を赤らめ、ニコニコ、ニコニコ。少女に戻ったような表情でした。その中で特に印象的だったのは美佐子さん。その立居振舞いは、さながら山の手の上品なマダムを思わせるほどで、ステージに上がると、上品な話し方で丁寧に挨拶し、乾杯の音頭をとってくださいました。ドキッとさせられるほど素敵な女性がそこにいたのです。

会が始まると、テーブル一杯に並べられたご馳走はあっという間になくなりました。お年寄りたちは、傘寿、卒寿のお祝いのメッセージとプレゼントに、丁寧な謝意や今後の抱負を語ってくださいました。普段は寡黙な方も、「ありがとう」と笑顔で答えて下さり、職員をびっくりさせていました。これがあるから行事はやめられないのです。とてもうれしい気持ちになりました。

今年が入所者の御家族だけではなく、デイサービス利用者や三芳村委託事業の予防型デイサービス利用者、地元上堀老人会の方々も招待し盛大な会となりました。アトラクションも、実習の受入れでお付き合いのある館山第一中学校のブラスバンド部に演奏をお願いしました。

水戸黄門をはじめ、お年寄りがわかるような童謡や昔の歌を何曲も練習し演奏してくださいました。好評だったのはだったのはいうまでもありません。曲に合わせ笑顔で口ずさむお年寄りも多く見られました。今後もしっかり行事を通し、地域との交流を図り、地域にオープンな施設でありたいと思っています。

(敬老会 実行委員長)

『秋の収穫祭』

「さあ、がんばって掘るぞ!」「今年はたくさんあるかなあ?」十月上旬の芋掘りの前の利用者の声です。

三芳光陽園の裏庭には、小さいながらもいくつかの畑があります。その中のひとつで昨年同様サツマイモを育てました。五月に苗を植え、手塩にかけて育ててきたサツマイモの大収穫です。

「さあ頑張ってみんなで掘りましょう!」

職員の声で一斉に芋を掘り始めました。我先にと、畑のど真ん中から掘り始める方、丁寧に畑の端から掘り始める方、掘り方は様々ですが、皆さんとても手慣れた様子で一生懸命掘ってくださいました。

「こんなに大きいのが取れたよ!」

「おー、この芋は立派だねえ!」



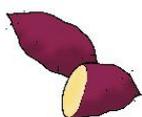
芋が土の中から出てくる度に声が聞こえてきます。大小様々、形も様々な芋でしたが、利用者喜びの表情がとても印象的でした。普段のおとなしい姿からは想像できないほど嬉しそうに話しかけてくださる方もおりました。

芋がほとんど畑から採り終わった後も、畑の周りの草取りを始めた吉田さん、まだまだ頑張るぞという様子でした。

採れた芋は数日後、天気が良い日に裏庭で焼き芋をして食べて頂きました。「とてもおいしいねえ!」皆、口を揃えて言います。「来年も焼き芋やろうね! 芋作ろうね!」利用者の言葉がとってもうれしく感じられた秋の収穫祭でした。

ちなみに、吉田さん、芋を食べ終わると今回も草取りを始めていました。いやはやとでも働きの吉田さんです。

長谷川貴史



「二十四年度の夏

そして ささやかなひと時」

「年老いたら施設のすぐ側に引越して、我が子と過ごせるようになれたらいいね」

豊岡光生園のご父兄達は、開園間もない頃、そんなことを話題にしたりした。重い障害を持った我が子を抱えて大変な思いをしてきた人たちだった。我が子の将来と自分達の生活を賭けて戦ってきたといっべてよい。

そして、長年の労苦の結晶としての光生園を建設した。ひとまずの我が子達の住まいであった。ここにかけるご父兄達の思いは並大抵のものではなかった。毎月、雨の日も雪の日も施設に通ってきた。環境整備の重労働に皆で汗を流した。

けれども、ご父兄達は一方では帰省の日を大切にした。「家族だから」「やはり自分の家だから」と言って、連れて帰った。喜びの反面、非常に大変な帰省の数日間であっただろう。だが、あまり大変なそぶりは見せなかった。「こんなことがありましてね…」さりりと笑い飛ばしたりした。

あれから四半世紀が経って、ご父兄の方々は年老いた。鬼籍に入られた方もいる。家の事情で帰省できない利用者も増えた。それでも親の思いは変わらない。

「私達としては、お父さんのお体が心配なんですよ。遠慮なさらずにおっしゃってくださいね」 「いやー、大丈夫だって。子供が帰って来なかったら寂しいんですよ」 そんなやりとりをする。どうしても帰省できない利用者のご父兄には、光生園に来てもらい、別館で帰省期間を一緒に過ごすようにしてもらっている。

この夏、園の世帯者寮が空いたので、その建物を使って、より家庭に近い環境で生活を試みる自立生活訓練棟「勝手の家」を立ち上げた。といっても大袈裟なものではない。職員などから使わない家具を調達したりして、一戸を構えた。

「日常の活動の中で、生活訓練に使っても良いし、宿泊訓練をしても良い。いわば、最重度者のためのプレ・グループホームかな。ご父兄にも泊まっていただければゆくり利用者と過ごせるわけだし、職員も借りて飲み会すれば。とにかく好きに使えば良いのさ。だから、”勝手の家”なんだよ。あはははは。」

夏の帰省期間には、七名のご父兄が “勝手の家” に泊まりに来て大賑わいになった。

「晩御飯どうしましょうか。うちの子は肉が好きだから。そうね、分担して買い物に行きましようか。お父さん、手伝ってくださいね。」

「私は、お風呂の支度をしますよ。」

「じゃあ、僕はテーブルを出すよ。」

「おたくの息子さん、トイレ大丈夫かな。」

「まだ大丈夫ですよ。」と職員。

「昔は、うちの子、大変だったんですよ。ずいぶん、落ち着いたのよ。」

これを機に親達の間で昔話に花が咲いて、ゆったりした時間が流れていった。利用者のご父兄の表情がすこぶる穏やかに見えた。長年苦労を重ねてきた親御さんたちの、そして利用者たちの、こんなささやかな穏やかなひと時をもつと作り出したいと思った。これからも、このようなひと時を、あたりまえのひと時を守っていきたいと思った。

豊岡光生園 園長 鳥居



【編集後記】

歳月も 赤くこまかく 紅葉山(喜八) という句が歳時記にあります。

豊岡光生園「園だより」通算百五十七号、三芳光陽園「光陽」通算四十三号、鴨川ひかり学園「ひかり通信」通算二十三号を数えます。今年四月に開園した湊ひかり学園「学園新聞」を加えて薄光会総合機関紙『きらめき』第2号をお送りいたします。

利用者たちの「元気」をお伝えできたとしたら、こんな嬉しいことはありません。